

## 海も、風も（鈴木幸一氏の経営者ブログ）

2010/6/1 7:00 | 日本経済新聞 電子版

ひょんなことで、長崎県に行く。

五島列島の北端にある小値賀（おぢか）島とイタリアの最南端の島、パンテレリア島が姉妹都市になるという話に、突然、かわかりを持ってしまったのである。

「鈴木さん、長崎の小値賀島と、チュニジアよりも南に位置するパンテレリア島が、姉妹都市になるという話を進めているのだけれど、ぜひ、応援して欲しい」

私が主宰している「東京・春・音楽祭」で、指揮をして頂いたリッカルド・ムーティさんと、「カルミナ・ブラーナ」の圧倒的な演奏の後、食事をしていたら、ムーティさんが、そんな話をする。

「Ojika island ?」

私には、聞いたこともない島の名前である。

「長崎のある由緒ある島らしい」

「知らない島だけど、できることは、なんでもしますよ」

「パンテレリア島は、イタリアで最南端にある島で、アルマーニをはじめ富裕な人たちの素晴らしい別荘がたくさんあって、ぶどう酒もつくっている」

安請け合いもいいところなのだが、長崎県には、結構、知人もいるし、ささやかな協力はできるだろうと、家に戻る。

ネットで小値賀島を探す。松浦や平戸に貿易港の地位を譲るまで、小値賀島は、貿易港として、重要な役割を果たしていたようだ。今は、人口3000人の小さな島である。

時間の合間を縫って、とりあえず、長崎の友人を訪ねる。

市内から車で30分ほど、茂木港にある魚料理の店で、夕暮れの海を眺めながら、旧交を温め、魚を食い、酒を飲む。

「なんで、小値賀島のことでと思っていたら、そんなことなの。雲の上の音楽のムーティさんから頼まれたとは、長崎県にとっても光栄な話ですよ」

友人の話では、小値賀島は、多くの隠れキリシタンが逃れた離島で、辺鄙（へんぴ）な場所に、当時の教会が散在していて、世界遺産にしようと、登録だけは終わっている島だという。ただし、いまや国境の離島で、島から見ると、中国や韓国の漁船や哨戒艇ばかりが目につく島だという。

「佐世保市との合併も拒否して、町長さんは頑張って、独自路線を貫いている島です。海外から子供たちを呼んで、民家に滞在させて、体験学習などしたり、頑張っている島です。イタリアとの話は、聞いてみたら、小値賀島もパンテレリアも歴史的に国と国とが交錯した場所にあって、海の底には、さまざまな価値のある物が沈んでいるらしい。水中考古学という学問があって、その縁で、イタリアの学者さんが、なんだか小値賀島に来て交流を深めているそうです」

陸上と違い、海底は沈没船やさまざまな遺物の保存状態がいいケースもあって、いまや注目を集めている学問分野らしい。今年の1月には、ユネスコの水中文化遺産保護条約が発効されたという。

小値賀島は、地理的にも、当然のことながら、中国や韓国との長い歴史があって、その海底には、沈没船をはじめ、歴史を紐解く貴重な遺物があるに違いない。



鈴木幸一（すずき・こういち）1946年9月生まれ。国内インターネットサービスの草分け。インターネットイニシアティブ（IIJ）を設立し、郵政省（現総務省）との激しいやりとりの末、93年にネット接続サービスを開始。後に続くネット企業に道をひらいた業界の重鎮。酒、タバコ、音楽と読書を愛し、毎春、東京・上野で音楽祭を開催、自宅は蔵書に埋もれる。

「明日から、ナポリ経由で、パンテレリア島に行くのですよ。丁度よかった」

翌日、昼食を約束していた小値賀島の町長さんにお目にかかる。いかにも、海の光が顔色にしみ込んだ朴訥（ぼくとつ）な島の人で、地中海の高級別荘地の島との姉妹という話と、イメージはつながらない。

小値賀島は、海の食材の宝庫だったのですが、最近は、環境の変化をもろに浴びて、大変だという。

「日本一の鮑（アワビ）や雲丹（ウニ）が、たくさん獲れて、魚も素晴らしかったのですが、このところ、漁獲高は減るばかりです。海流のせいか、海は温度があがって、海藻が死んでアワビなどが獲れなくなる磯焼けの状態になるし、中国や韓国、北朝鮮からは、あらゆる漂流物が押し寄せて、海岸をゴミの集積地にしてしまう。針のついた注射器から、得体の知れないポリバケツ、なんでもありです。漂流ごみの除去にもお金は掛かるし。魚も生きているのが大変ですよ。最近は、鯨が増えて、鰹（カツオ）の稚魚なんか、鯨のお腹に入ってしまったて、鰹がとれなくなったり。イサキなんていう魚も、ほんとうは一本釣りに限るけれど、最近は、撒き餌でとったイサキがならぶ。撒き餌で獲ったイサキなんて、人間で言えば、内臓疾患に掛かったようなもので、臭いわけ。小値賀島は一本釣りの魚だから、臓物が健全で、まったく臭いがなくて、旨いものですよ。酒がお好きなようだから、ぜひ、島に来てくださいよ」

姉妹都市の話はさておいて、ひとしきり、環境の変化というか、国境の島を襲う環境汚染と、魚の美味しさについての話が続く。大陸から放たれた海の漂流物は、大陸の浜辺に戻ることはなく、必ず日本に辿り着く。島の周りも、日本の哨戒艇が来ることは稀で、殆どが、大陸から来た船だという。

海も、風も、大陸から日本に向かって流れる。大陸で起こっている現象から、日本が逃れることは難しい。日本を覆う黄砂も年々激しくなる。湖を酸性化する風を止めることもできない。環境問題をひとつの国で対応することなど、無理に決まっている。

さて、水中考古学なる学問がきっかけというイタリアの島との交流。島のまわりの海にどんな品々が沈んでいるのだろうか。海の底に眠ったままの青磁や白磁の逸品が沈んでいるのかもしれない。

ムーティさんは、パンテレリアも小値賀も旨い酒の産地だと言っていたけれど、町長さんは、

「水がなくなったから、酒はもう造れないけれど、腕のいい杜氏がたくさんいて、みんな酒どころへ出稼ぎに行っている」と言う。

パンテレリア島の海の底には、ハンニバルの時代の武具が沈んでいるのだろうか。国境の離島を治める町長さんが、イタリア最南端の島で歓迎されて、姉妹都市になったら、ほんとうに、素晴らしいことだと思う。海の輝きをもった朴訥な町長さんは、きっと、パンテレリア島の人々に愛されるに違いない。

鈴木幸一 IIJ社長のブログでは、読者の皆様からのご意見、ご感想を募集しております。  
[こちらの投稿フォーム](#)からご意見をお寄せください。

[経営者ブログ トップ](#)

[ビジネスリーダー トップに戻る](#)

本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は、日本経済新聞社またはその情報提供者に帰属します。また、本サービスに掲載の記事・写真等の無断複製・転載を禁じます。

Nikkei Inc. No reproduction without permission.